



東京妓情  
 醉多道士戲著  
 下

76
4063
3



門 76  
號 4063  
卷 3

東京妓情卷之下

花柳御門 醉多道士戲著

○妓の成立

石崇の緑珠吾知らざる也源郎の静姫吾知  
 らざる也否之を知るも此と平康の籍に附  
 けし垂柳門頭又立ち蕩子と招くの妓と見  
 做し以て澆季の蘇小と比るを憐むる  
 凡妓有りて以來深川の諸姐も知らぬ今の  
 妓ほど野卑あるものもあらざり又俠なまも



○可憫被  
 夜鷹視  
 ○魔王曰  
 情入則有  
 俠

東京妓情

卷之下

○感慨

のちあらト。蓋しその野卑に陥りたるハ妓  
乃罪あらばして遊客の罪ふる乎抑亦時勢  
の然らしむる所乎昔も妓とふるに皆か  
少女の時より夥多れ辛苦と嘗め艱難と経  
て漸く半玉となす。更も諸姐に揉まれ引廻  
され始め一幟を立てしものなるが。今も  
十中二三も一足飛々妓とある者あり則ち  
良家の阿娘も一姿色あるもの又も技藝  
あるもの。その家零落し活計のため之

○中洲曰  
醉翁老故  
愚痴如斯

○蛙之子  
即蛙

となきもの或も茶肆の女は三絃を弄き  
るもの。自家に来る客と的てある者其他  
權妻乃古手。三味線の師匠。その下等おしく  
應來一途は現も者も。私窩子あり湯屋  
の茶汲女あり。酒樓の婢女あり。若し照魔鏡  
と以て子細く之と照せむ。異類異形の種族  
ありや明かりなり。その野卑あると俠氣ある  
亦何ぞ怪しむに足らんや。然もこそ。同ト  
妓籍に入りおがら。柳橋に出づると難うる

○有三毛  
有班毛有  
黒有赤

○白痴與  
登要路何  
擇

その所り。赤坂又出づるとその所とるも  
の所り。是れ妓とあるまでの原素に關係す  
ををかり

妓の成立に三種の別あり曰く自前曰く抱  
へ曰く叩き別是れなり

○自前

他人の束縛をうけど他人の支配を蒙らば  
自前氣尽る者之を自前とりふ自前の中  
小又二途あり

○醒史曰  
妓亦講自  
由主義

○其一

親もなく良人もなく。自うり一戸の主と  
うて技をうるもの。之を妓中第一地位  
在るもの。如何とされむ。その身更ら  
人の束縛を受けば。小言を云ふ者もなく。稼  
ぐ所の金も丸取りあへず。耗途少く。又心  
々好ぬ客を体よく断りて應ぜざ  
るも。彼此れ言はれ。或も氣保養。次郎さ  
んと手を取りて遊さん。と欲せむ。唯會

○魔王曰  
戻返口不  
聞

所の名札と裏返へて置けた十日廿日出  
勤せむとも。我が勝手にしと些の苦情を  
総て我俵一杯を行なうものなり。

○其二

その名を自前おれども親掛りあるが故  
我が自由を行ふと能はば。その得る處の  
金も悉く親に納れ。其身も終りに小遣ひ錢  
と貰ふのみ。然る代り衣裳萬端の責を負  
む。皆か親の手より之と辨し購もむ。然れ  
ば○補不足  
乃特別  
○應來債  
乃特別  
○補不足  
乃特別  
○補不足  
乃特別

○醒史曰  
與日本人  
民無庭徑

ともその親他になきべき業ありて少うた  
りとも女の足らざる所を補へむ。その妓も  
好造化かまとも。若し一も女二も女と女と  
的々たる親なきを所謂太郎兵衛駕籠めて  
その妓こそ我が金我が自由なるに言を犬  
骨損のみ。されむ西や斯る親子の間ぬ往  
々苦情起り情夫と逃亡し又も前金を借り  
て他の抱へとある者あり何きにくも斯  
の如き自前を憫然の文字と通がれざる者

なり

○抱へ

自前乃妓となりん乎。家屋及び衣裳等の資  
 本なし。若し夫れ此の若干金河をたそは親  
 縁へ貧婪飽くあたと知らざる者と雖も豈  
 その女を餌とく更らに慾の皮と突張ら  
 んや。その此あく且つ金々焼眉の急あるよ  
 り女の姿色或ハ技藝と抵當とく前金を  
 借り抱への藝者である。抱へも衣食住に於

○仙史曰  
 多矣哉抵  
 當種類

○使抱主  
 政府是顛  
 覆者

○粹史曰  
 寫出妙

く苦勞なりと雖ども。その得る所の金を纏  
 頭と并せ抱へ主へ納れ。半文錢だも手に  
 留まらば。偶ふ欲しきものを得んが為め  
 窺りに春を嚮き以て受けし金も誤て抱主  
 の見認る所とされむ。小言の上に奪取られ  
 其身を寢骨折りて鴉母丹取られたる諺に陥  
 了。その他一身上総て束縛を受くるの故  
 一日も氣保養らしき歡を取らばと能はば。  
 殊々数日お茶と噐き。冷々逢へむ抱主の氣

○中洲曰  
醉多二字  
可削

○妓社會  
亦依頼電  
信

色と損ト辛き目も當てられ技量ありの惡  
口と頭上又振り掛けらる。歎息の息氣を数  
へて首と襟に入れ。疊の塵を撚りく鬱ぐこ  
と抱への藝者をも間々ある例あり。されを  
抱への何の樂みありく勤むる歎と問をも  
情ある醉多らしい人を頼み暮らにのみ  
○叩き別け  
衣裳あり姿色若くハ技藝あり而して一席  
と擔任するの才ありと雖ども酒樓及び同

○共和政  
事

業に馴染なけむハ一幟と樹つる能はは是  
れ歌妓社會の通慣あり。是ハ於て乎姉妹  
の家又依頼し此ハ寄寓し技を賣る者之と  
叩き別け云ふ。即ち得る所の揚代金を折  
半して別けたる謂なり。されを叩き別けた。そ  
の戸主に三飯の世話こそおれ。他も一切  
保護を受けは却て已より利する位あれば  
自由較行をれ我ハ稍働かむ。親掛りありぬ  
自前へと殆ど趣きと同ふをれども。只人の

○歸化之  
民可憫

家小寄寓するを以てその家を利せざれを  
 氣の毒との情有るが故に自由の權も藤八  
 拳ほごの振りまをされむ。況して他處より  
 移住せし者おれを自らの一席も餘計賣り  
 てその地位と固くせんとの情態有るもの  
 かり  
 歌妓の成立ちも大凡右の如くかれを若  
 妓と情婦とせんと欲せむその一の自前  
 叩き別けに極め給ふべし

○藝者の辛苦

○目下諺  
嬌笑者當  
年之狀皆  
如此

何處の野暮ぞ妓も氣樂か家業と云ふ。中年  
 ものを去來知らぬ。少女の時より妓とから  
 んと欲するものも其一幟と立つる朝まで  
 其辛苦実々名状をべうらざる者有り。仮令  
 むその身如にして家貧しく。其親他年その  
 子に依りて糊口せんともふも通例の游  
 藝と習ふべからぬ。然るに日々薪  
 水の爲めに追ひ使われて貧乏の足早きも



○賣奴之弊

の。豈<sup>あ</sup>も四五<sup>ねん</sup>年間遊藝<sup>あそび</sup>は捨<sup>す</sup>るの金<sup>かね</sup>あらんや。  
 是<sup>こゝ</sup>は於<sup>お</sup>て乎<sup>や</sup>養女<sup>やしやうにょ</sup>の名目<sup>なめい</sup>を用<sup>もち</sup>ひ年限<sup>ねんげん</sup>を定<sup>ま</sup>め。  
 妓家<sup>ぎか</sup>へ賣<sup>う</sup>り渡<sup>わ</sup>り習<sup>しゆ</sup>慣<sup>かん</sup>あり。その年限<sup>ねんげん</sup>も五年<sup>ごねん</sup>  
 より少<sup>すく</sup>からば七<sup>しち</sup>年<sup>ねん</sup>より多<sup>おほ</sup>うらば一<sup>いっ</sup>身<sup>み</sup>  
 の代金<sup>しろがね</sup>も十圓<sup>じゅうえん</sup>より廿圓<sup>にじゅうえん</sup>までの間<sup>あひだ</sup>も。人之<sup>ひと</sup>  
 と聞<sup>き</sup>けを其<sup>その</sup>廉<sup>れん</sup>ある小<sup>こ</sup>仰<sup>おほ</sup>天<sup>てん</sup>も一<sup>いっ</sup>と雖<sup>な</sup>ども  
 決<sup>か</sup>く廉<sup>れん</sup>あるものよ。らば蓬<sup>やなぎ</sup>髮<sup>かみ</sup>汚<sup>か</sup>衣<sup>い</sup>無<sup>む</sup>能<sup>ね</sup>  
 無<sup>む</sup>藝<sup>ぎ</sup>の一<sup>いっ</sup>少<sup>せう</sup>女<sup>にょ</sup>若<sup>しやく</sup>干<sup>かん</sup>の金<sup>かね</sup>と出<sup>い</sup>し爾<sup>に</sup>後<sup>ご</sup>衣<sup>い</sup>食<sup>じき</sup>  
 住<sup>ぢゆう</sup>の雜<sup>ざ</sup>費<sup>ひ</sup>も勿<sup>も</sup>論<sup>ろん</sup>三<sup>さん</sup>絃<sup>げん</sup>踏<sup>た</sup>舞<sup>ぶ</sup>種<sup>しゆ</sup>々の藝<sup>ぎ</sup>と仕<sup>し</sup>込<sup>こ</sup>

○請聴

○藝者生徒

む少<sup>すく</sup>くとも三<sup>さん</sup>年<sup>ねん</sup>以上<sup>いじやう</sup>の年月<sup>ねんげつ</sup>と要<sup>よ</sup>むべし。  
 その間<sup>あひだ</sup>の費用<sup>ひようぎん</sup>も幾<sup>いく</sup>何<sup>なに</sup>ぞや。稍<sup>しやう</sup>く半<sup>はん</sup>玉<sup>ぎよく</sup>とか  
 一<sup>いっ</sup>進<sup>しん</sup>で一本<sup>いっぽん</sup>小<sup>せう</sup>至<sup>し</sup>り最<sup>さい</sup>早<sup>そう</sup>世<sup>せい</sup>間<sup>かん</sup>並<sup>なら</sup>みの藝<sup>ぎ</sup>者<sup>しや</sup>と  
 かり何<sup>なに</sup>色の席<sup>せき</sup>へ聘<sup>へい</sup>せらるるも敢<sup>あ</sup>て慙<sup>ぜん</sup>か  
 うらば自<sup>じ</sup>後<sup>ご</sup>その力<sup>ちから</sup>も由<sup>よし</sup>りて利<sup>り</sup>せんとも  
 頃<sup>ころ</sup>も早<sup>そう</sup>や七<sup>しち</sup>年<sup>ねん</sup>契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>の風<sup>ふう</sup>立<sup>た</sup>ちて。その実<sup>じつ</sup>家<sup>か</sup>へ  
 返<sup>かへ</sup>へさざるを得<sup>え</sup>ば。されもその主<sup>しゆ</sup>の真<sup>ま</sup>々<sup>ま</sup>利<sup>り</sup>  
 を就<sup>す</sup>處<sup>ところ</sup>も三<sup>さん</sup>年<sup>ねん</sup>若<sup>しやく</sup>くハ四<sup>し</sup>年<sup>ねん</sup>間<sup>かん</sup>に在<sup>あ</sup>るのみ喻<sup>たと</sup>  
 へむ恰<sup>ちか</sup>らも官<sup>くわん</sup>立<sup>た</sup>學<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>の賃<sup>ちん</sup>費<sup>ひ</sup>生<sup>せい</sup>徒<sup>た</sup>一<sup>いっ</sup>般<sup>ぱん</sup>と謂<sup>い</sup>

○何思此  
少女為終  
公之權妻

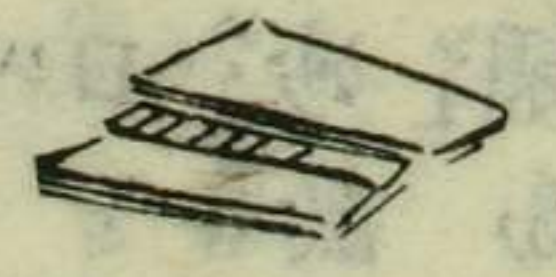
もさると得た身の代金の僅うかす殊に怪  
しむ毎足らざるなり  
此少女のそ乃家に住込むや始めも家婢の  
如く逐ひ使もれその暇小技を習ふに二六  
時中嫌ひもあく。三弦畢れを太鼓太鼓卒れ  
を横笛横笛畢れを踏舞指傷と血と蘸ま  
盛夏も満身汗の爲め浸され嚴冬も寒  
の爲めに指凝え終るに調子と狂もそれむ  
其妙分よ打され罵らる時とく懲らしめ

○花柳日  
喝味々々  
○魔王日  
涙滴か落

の爲めとて食と與へざる惨酷又遭ふ古語  
小曰ふ石の上小も三年と雛妓の辛苦豈  
樹下石上乃比あらんや。已小して技稍や熟  
せむ姉分又従て始めく半玉少く出勤し自  
來燕席に侍らる様子より客との應接酒樓  
への掛け引き撲され罵らる乍らも学むが  
るを得ず。且つ已ま出勤せられ少るその家  
を利もるの任を負へむ茶屋も阿り客も媚  
び一本も多く賣ること強勤めざるを得ず

願 乃 竹 准  
 作 吹 煙 竅  
 他 心  
 小 六 乃 士 改

□  
 □



藤原 如 情 觀 下

九

嗚呼可愛  
想哉

夫れ女子生れて十二三歳も雛鶯の將に谷  
の戸と出んとほるの時あり。幽梅の將と綻  
びんとほるの候あり。之とて良家の阿娘  
ならしめむ家婢に傳かれて春ハ閨巷に羽  
子を突き。鞠と弄し又も郊野に出で、踏青  
籠か、げて菜摘り日蔭と送りありん。冬  
も玻璃窓小火閣を擁し草紙を讀で日と涉  
り時好の物をねぶりて已まざるの妙齡を  
る。雛妓も春も春も春も春も乃閑るふ

○請聴

冬を霜枯れよ由て冷を告げ御茶と磴きて  
戸主の氣色を摸し他所の家娘の母と連れ  
られ詣りて。欲しき物を買ふと見てハ  
羨ましく思ひ。又も大福餅おでんも思ふが  
俵も口へ入らば世も雛妓ほど頼りなきも  
のをゆらト稍しく一幟を樹るに至れを新  
内氏の所謂涙にかくも振の袖とめれを最  
早の叶まやうあくる出来ぬ中より茶屋夫れ  
への付け届け仲間の義理も十々五ツハ

○仙史曰  
大喝喚

夏... 考...

○醉翁曰  
通人克記  
之不措惠  
投

自辨せざるを得ぬ。且つ抱への身なれを純  
粹の自前又を叩き別けの妓と春秋の衣裳  
その佳麗を競うんとするも俛あられ粉飾  
美と争むんとするも心に任せば暗に羨む  
の一字と啣みく歎息を於のみ凡そ斯る妓  
も七年間の光陰を長くもあかと思ふ勿  
ん。既に年明けく自前となすを更らに一世  
帯の辛苦を増しその実母弟妹を養むざる  
と得ば目下物價騰貴の際鬚眉男子と雖も

○究糊口  
者反聘此  
等妓

○欺鼻下  
長豈無理  
乎  
○天下重  
生女宜矣

活路又徘徊ひ。腰を簪官に屈して俸を仰ぐ  
者多き中。小。軟柔の一。女。小。く。四。五。人。を。養  
ひ。その。餘。あ。らん。こと。と。願。ふ。特。夫。れ。餘。り。あ  
らん。こと。と。願。ふ。のみ。あ。ら。ば。初。春。絞。付。の。礼  
服。初。夏。の。更。衣。盛。夏。の。新。裁。仲。秋。の。裕。晚。冬。の  
綿。衣。そ。の。他。新。帯。粉。飾。の。具。此。社。會。の。通。慣。と  
し。く。一。も。古。物。と。用。ゆ。る。こと。あ。ら。ば。皆。か。流  
行。と。追。ふ。もの。と。も。試。み。よ。之。と。算。せ。を。一。衣  
一。帯。二。三。十。圓。の。上。よ。出。づ。之。と。辨。む。誰。れ

○醉翁曰  
天下之人  
延過無由

○醉翁曰  
余屢遭此  
且

が力が窈窕一少女の一手は出づるかりそ  
の聘は應じ歌舞し酒と飲み爵と釀きの違  
をまより勤まるそ雖も然らされを決し  
勤まるあつらひに所らひ世の無情漢さこそと  
思ひ之と憫みその鼻下と長ふし可あり

○藝者のあつら

昔一の落語家あり屢々或大名の御殿へ  
召され種々滑稽を尽くし諧謔と演じたる  
にその殿は仕ふる女子以為らく斯の如き

○醉翁曰  
此落語家  
與余同感

男の妻とありを一生氣樂からんと。則ち勤  
めを辞して後遂之が妻となりき。一日そ  
の夫ふいふ阿主の御殿へ出の時洒落  
を云たり笑談と言たりあしづら無夫婦  
に成て一所は居となり面白からうと思つ  
故色々辛苦し來て見むを平生苦い顔  
として笑談一つお言ひでないがあぜだへ  
夫馬鹿を云へ敷居と跨ぐと騒いぶり洒落  
を云ふのが商賣だらうら家で苦い顔と

○仙史曰  
豈獨妓而  
已

わらわが結句保養ぶ哩と。余假りて妓の心を  
推さん夫れ妓の席に陪し意を迎へ歡と  
呼ぶも家業あり況し三絃と弄し聲曲を  
るとや。その心敢て之となはと喜むは三絃  
とお座付ふ仕舞たく思ひ。他も酒を飲み  
佳肴を啣み沢山祝儀と貰ひ時々花見遊山  
芝居行等所謂牡丹餅を以て頬を叩り  
と望むものなり。然れども斯る我伶おハ  
應ト難しと雖ども真愉快も取らんとする

粹客も此心と推さんをわらわらうは

○藝者の性質を知る事

人の性質ハ必らば拳動に頭するもの也  
人々一妓の性質を知らんとあつむむ尤もそ  
の拳動に注意すべきなり。先づその坐し就  
くや客乃烟草入と見て之に注目し或も衣  
裳と見て考へる所あるもの。而してその妓  
の風俗も佳麗ありて意氣ならん何とあ  
趣きあるものも風致あるものなり。席に就

○何字注  
意見之

蘇州  
如  
卷之十一

○魔王曰  
此疑勝可  
否や馴々しく又ハ樓婢と喋々客と客  
臭いとも思ふは其の風俗年齢より年寄り  
おみたるも酒乃相手に面白きものなり障  
子の開閉はくく言語づかひ勇みは  
て風俗ハ淡粧意氣に作り時々客の顔を凝  
眸小見総て狭あるも俳優と愛職人を好  
む浮氣者なり語少く萬事扣へ目にし始  
終一步を樓婢に譲るものも実体なり  
座興の寝入らんとも見ても勢とつけ

○如此妓  
易騙

歡を喚び客の氣に入る語とはトめ総て飽  
きと來しめさる様注意するも老練あるも  
のとし言へ亦敏捷あるものなり時々漢語  
を用ひ不熟の洋語と挿み獨り利口ぶるも  
常に書生客に接し習ひ性しかりしものか  
るべけきどもその実生意氣の天保錢藝者  
なり。三絃も弾かば唯客の氣とのみ迎へ又  
酒と飲み時々秋波と客に注ぐもの  
此奴必らば應來藝者あり鷹様にし生意

○諸君記  
此一段



○醉翁曰  
余有覺言  
之非憶說

氣の語氣なく又叨り家婢に媚びを容の意  
 とて亦闇雲に迎へざるものも必らに他  
 日その嬌窩に女將軍とある乃度量有る者  
 なり。游客もくその性質を見極めてその意  
 に投じ遇らふととてその遊び一段の快味  
 と添へ果てハ情夫の中に引込れ御膳と  
 据えらるゝの妙境に至る是は我粹学の奥  
 許に〜〜決し〜〜叨りに初心を傳ふべきも  
 のに何れぞ秘をべし秘をべし

○魔王曰  
非醉翁不  
能雪此冤

○尤々々

○春を賣るに二途有る事

世人錦帯を説く妓を目〜〜一概に應來妓  
 と詈り去れども是れ未だ二途有ることと  
 知らざる言草あり。若し苟も錦帯と解ら  
 ず則ち此れ應來妓ありと云ふは明治天地  
 の妓ハ悉く應來者流ありと云ふはんハ何  
 らぞ此れ酷あり可愛想あり。凡そ應來妓と  
 稱するものも春を賣ると本色と一三絃と  
 付け合せと故に始めより價を定め然

○醒史曰  
念字有無  
量之意味

○此情理

る後巫山よ入る者おれを真正の應來妓と  
言ふべけきども。他に情実ありく然るもの  
何れ。その情実とも何ぞや。凡そ客の長く一  
妓を愛顧するに到底念われむあり。而して  
未だ色に現るまじ。妓早く之を知るも此亦  
色小現るまじ。況し格別好らるる男に  
けりさる上も殊に素知らぬ顔とせざるあり  
べしと雖も。恩義の繋る處情に於て黙し  
難く。又その心を取ること堅く人にも終

○魔王曰  
醉翁暗似  
保護豊的  
藝者

子情の遂げ難きと知り愛と他の妓に移し  
我と疎んじ。意地づくに至ると或は我に耻  
と與へしめんも未だ知るべし。殊小愛  
されたる客と俄に他に奪もきてハ聊か  
顔小係るるを以て遂にその意小従ひ錦帯  
と解くものあり。是れ決して應來妓にけら  
ば風流の情と解るるもの云ふん乎余故  
に茲小二途あるまじと述べて應來者流を  
らぬ諸姐の冤と雪ぐ

○情夫の見立て

情夫を勤め乃うき晴らうとし。都々逸氏か  
 言にうく流石うく妓の情と穿ちうそのか  
 り実ふや攀折の人小随ふと悲しみ舊と送  
 り新と迎ふる乃妓にうられむ。その憂いと  
 消を者なくんを勤まらざるなり。當時妓の  
 情夫と擇みう多くハ鳶の者或ハ博徒或  
 も俳優よ止る様ありう一新の世愛よつ  
 れて唯此一事のみ稍上流小進み今ハ十中

○慷慨意  
長

○似山半  
可肛門一  
針

七八を堅氣の人を擇むことうてなれり蓋  
 情と慾との二點張り乎抑他年身と處を  
 るを心う乎是故に敢く美男子を望まは  
 又遊藝に長ト意氣を以て任むる等の人物  
 もペケと爲は。総う士流商家と論ぜは他  
 年志と伸うて爲をうの人物うて物艶  
 うう如何も頼み甲斐あり別けく下々  
 小行き渡り男子らうい挙動あり人と擇ぶ  
 が如く然れども性の相集る處鳶の者職人

○為情夫  
亦難哉乎

○勿乗口  
車

博徒等と愛するもの猶ほ多し此ハ場末  
の妓に多くしく中流以上の客に接するも  
のあり稀れ小聞く處あり然るが概しく  
いつて錢遣ひ吝なり万事に抜目ある人  
と情夫とあるハ此社會一般の凡習と云ふ  
べし

○歌妓と酒樓との關係  
藝者と酒樓とハ遊び乃兩輪は客と此車  
に乘せらるゝて歡と取るものあり故にその

○壓制

一と欠けを愉快に進むことありて飲み潰  
るゝ歎又ハ恍惚とて妓の顔と眺むる飲  
の一段あるのみさるからに妓と酒樓有て  
立行き酒樓も妓有て繁昌を之を車の兩輪  
とを豈に誣言か〜んや然らむその權衡  
に於て輕重なく平均あるべきに妓ハ如何  
ある地位に立つもの雖も一歩を酒樓  
に譲らざるを得ず若し然らば西洋流  
と同權を用ゆれと酒樓もその妓を憎み客

○此弊豈  
獨妓社會  
乎

の命とりくども在と不在と稱し呼ぶ  
或も無実の説を作りて愛顧の客に告げ断  
念せしめんとは是れ所謂犬乃糞の雛ある  
そのめく妓の甚ど恐るる所なり然れども  
酒樓も亦切り小妓と輕蔑とありぬ情実  
あり則ち妓は詭と構へらる種々の惡説を  
以て客を煽動て他の酒樓に就て飲むこと  
を進むれをなり殊々妓の玉一本に附き四  
錢づの剥錢を取り尚や祝儀返へると稱し

○魔王曰  
喚起燕趙  
徒來

て三錢乃至四錢を取れを妓も酒樓を益そ  
とも酒樓も妓を益する所あり然るにその  
權を張ることならんは豈小憐むべきに  
何ぞや此亦類多しと獨り此社會のみ  
に何らば世間亦多うるべし

○妓奴の事

五尺の躰に兩個の畢丸を具へ且つ四支五  
官に不足あき身に何りかぐ男子の最下  
等小位し極めく卑し極めく劣あるを妓

○仙史曰  
怡哉理屈

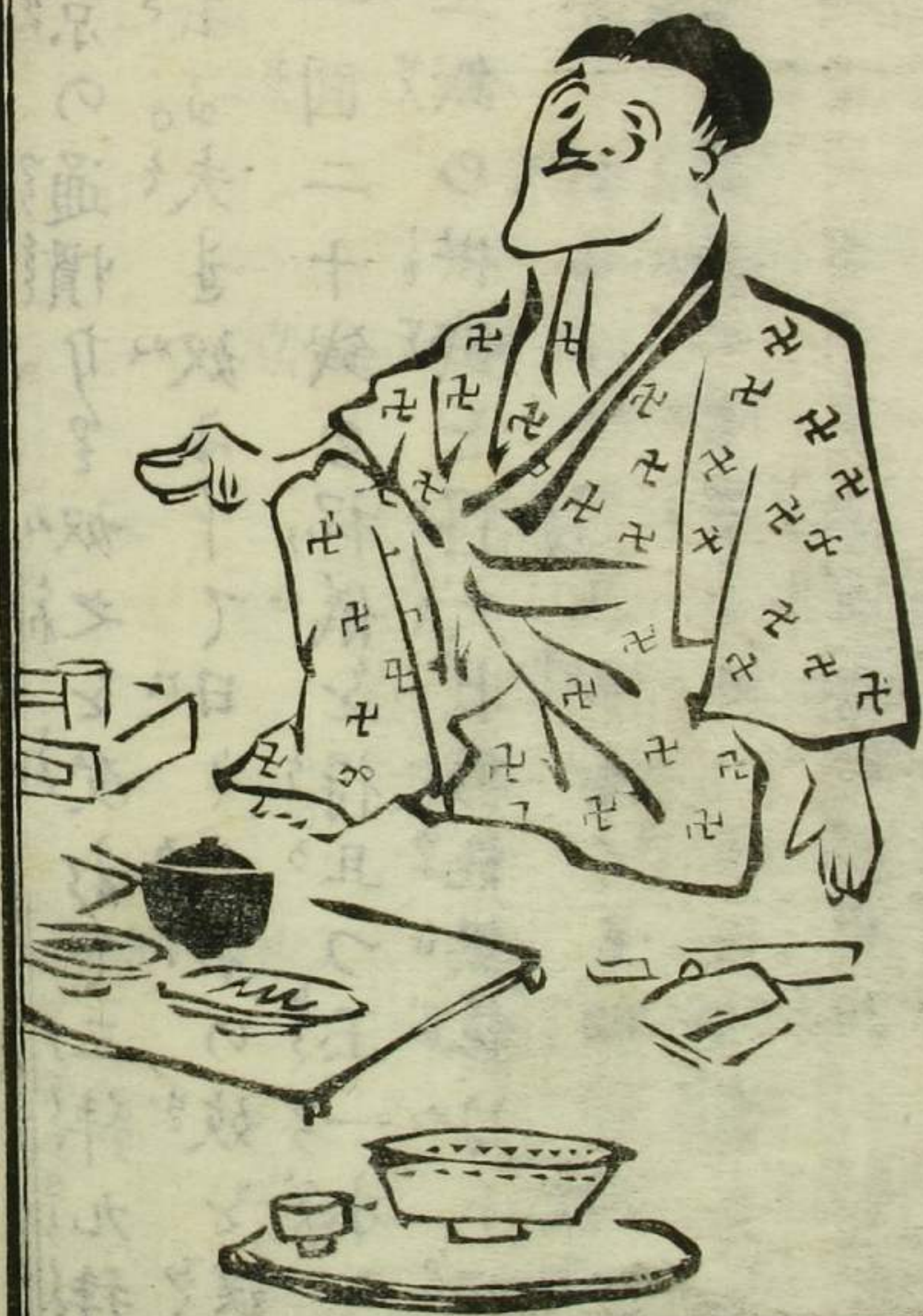
○福源一  
般

奴に若くものなり。三絃を抱へ妓の尻に付  
きその高履を把りその衣帯を疊み其禪の  
皷を延む。総て藝妓乃奴隷とあるもの誰  
う人間の部類に加へる之を待んや。然るに  
彼恬として之に安んず他の罵詈を顧みざる  
も蓋し利益あれをあり。東京妓の客席に赴  
くや必らば妓奴を従ふ。奴席末に候し野蛙  
一般に匍匐叩頭して賀を奉り壽を献ぐ。此  
時客も少くも廿錢以上の祝儀を賜ふ是

○與拂舞  
塵者無差別

れ東京の通慣なり。奴之と受ねる三拜九拜  
して去る。夫は奴あつて日々六名の妓を送  
ねる。一圓二十錢の祝儀を得且つ玉一本  
付き三錢の供錢を得。夫れ無能無藝目小一  
丁字あき奴あつて月も少くも四十圓以  
上の金を得他の罵詈をかへりみれば自ら  
人外不安んぢるも亦宜くはや故に奴小  
金満家あるもの柳橋の岡崎屋の如き  
土藏あり地面を有せり或は金を貸し

錢地汰水  
好頭  
研子致口



東洋の風俗

○又是斗大眼

のゆり或は家作とあつて人に貸きそのゆり。試みに之と祝儀と投ぐる客の資産は比べたらんゆを間々奴の富に及ぶるものゆらん。斯の如く奴も利益あるが故に奴とゆふも株式と以て賣買し切りあふること能はば。若し夫れ妓奴が株と株式取引所へ於て競賣せしめを恐らくも微々たる銀の株券より二割方も上流あつて人株も亦種類多い哉

○妓と奴との関係

妓奴も妓の奴僕なり。妓に依りて生活と立るそのなり。然れども妓は對して頭の擧る末ハゆりトと思ひの外亦然らざる情実ゆり情実とも何を凡そ奴も會所に集まりて酒樓ゆりの報告と得妓の在不在と答へ。然して後之とそその指名の妓小傳ふる役あり故に若し妓が奴を真の奴僕視せむ。彼れ下等人間たる地位不在すも拘らば怒りと

○醉翁曰  
次郎さん



而後知之

帯びて在と不在と云ひ又も悪評を立酒樓  
小觸れ込み客なららしめんとし。又情夫の  
間秘をべきことを嗅出し世間又傳へ往々  
妨害もあつとあるを以て所謂憎い鷹や  
餌を飼の古語の如く妓奴を真又奴視せざ  
るなり而して奴の三絃を抱え客席に候を  
るも敢て祝儀一途もあらばその客乃誰  
たると見認めその妓を愛顧する客又あら  
ざして他の妓乃客たるるときも窺はに他の

○持灯燈  
顔妓不注  
意千万

妓小告ぐる習ひあり又情夫に逢ふとき又  
鼻下長と騙して金を奪ふ時妓奴之が  
挑灯持をかほと以て稍同等の位地に置も  
のなり

○纏頭の事

纏頭といふ妓女與ふる祝儀の名目あり王昌  
齡の詩小

昨夜風開露井桃。未央前殿月輪高。平陽歌  
舞新承寵。簾外春寒賜錦袍。

東宮妓情

古

此錦袍も則ち纏頭マキカサにして祝儀あり彼の錦  
 纏頭マキカサの語よりマキカサ祝儀イハヒと纏頭マキカサと云ひマキカサか  
 らん。因果道士纏頭謂優技之利物と云ひマキカサ  
 も當を得たるもの也此纏頭マキカサと與ふるおと  
 ハ東京に限里て他の地方又聞のさる處か  
 りその金の多少種々ありと雖ども五十銭  
 少分マキカサからば三四マキカサより多うマキカサに夫  
 を揚代マキカサと拂ひて聘マキカサしたる妓マキカサなれを纏頭マキカサを  
 やるも遣らざるも客の勝手マキカサ又在りて決マキカサ

○地方人  
 讀之應仰  
 天

請求マキカサせらるべき謂マキカサれあさに慣習マキカサの  
 久マキカサしき今ハ本人マキカサより請求マキカサこそせされ若マキカサし  
 客の之と投マキカサぜされば樓婢マキカサ竊マキカサりに之と乞マキカサひ  
 或マキカサち勘定マキカサの書付マキカサへ明記マキカサするところり是マキカサも実マキカサ  
 に憎マキカサむべき習弊マキカサなまじりその内実マキカサ小切マキカサ入マキカサ  
 て之を見マキカサねを亦マキカサ已マキカサむを得マキカサる情実マキカサありが  
 如マキカサし何マキカサとなまじり妓マキカサ小富有マキカサなるものも甚マキカサど  
 少マキカサれぬ大抵マキカサ衣裳マキカサ若マキカサくも飾粧マキカサ乃マキカサ代金マキカサ滞マキカサ  
 して六七十マキカサ圓マキカサも付マキカサき回マキカサるものあり而マキカサし

て時の寒暑と問ふは業の冷熱と論ぜり平  
均一昼夜小二田の聘と受くるものごと  
の獲る所の金と掲ぐれむ

一玉二本 昼夜少く四本 代一圓

一祝儀 一圓ツ 合二圓

○諷諭

都合三圓かり月得る所乃金九十圓ありて  
奏任官小相當せり。婉婉たる一少女に  
月は此多額の金を得るも鬚眉男子と  
漸殺せしむる程ふも此三田の中より

他○食猫腕  
似惡犬

前小云ふが如く妓奴酒樓等又割前と與へ  
そは上會所少く玉敷みく刃錢と取らむ手  
に餘る所も漸く二圓二三十錢あり。さて家  
へ歸れを借金の日賦月賦或は水天宮の掛  
錢金毘羅の講錢或は芝居の天幕寄席乃繪  
びら又も引幕二田の税地代店賃種々雑多  
の物入里も只妓の一柔腕小向ひく集る之  
を概算せむを月未又餘る所果しく幾何を  
や。その上新衣新帯の工面も光陰の流る

○纏頭不殺人者

に從ふて来る若し東京妓ふして纏頭と得  
もんを一日も立往らざるべし是れ揚代  
り纏頭を的よする一般の習慣とありし所  
以あり而して新柳以下二等まぐの藝妓ハ  
一圓の纏頭と与ふるも猶々各坊とまぐる氣  
組みあり二圓以上ならざるは難有とも思  
ふに蓋し紳士豪商の游冶し如斯投ぐる  
より又一の弊と醸したる者あるべし二等  
以下も五十錢以上二圓まぐ客の心小任ま

○我々迷惑

べけまども一回より少く與ふることハか  
らざるべし天神の妓毎に云ふ書生さんの  
三十錢と恐れべありと尤もと尤もだモウ  
一ツお買よ尤もだア

○席の速のあるを好む事

身も呼われし藝妓ありその玉を賣るその  
なり故に席の長からんことを願ふならん  
が。次郎さんその人の外も決して永きを願  
まば何故不然る乎と云ふ。席の初め話

○魔王曰再出

も尽き酒も旨く三絃も疲うれは意と  
迎ふるの術も有り飽あさきども半日以  
上の永きに至れむその席又馴れ物に飽き  
暗々地又欠伸を吞んで早く帰途に就らん  
ことを念ひ或は婢と歎息し永屍の人だ  
和いとの隠語も事に觸れ物につきて現  
るなり。謙席も斯くあり自ら不興と  
なり何の妙味もなかりべし故に妓が席  
を起ち欄干小憑りし他所を吟め或は志を

○仙史曰  
大賛成

志を席を離るるありは飽きの來たる  
極点と早く切り上げ帰るべし然らざ  
れば縦ひ万錢を一擲するも遊治の快味と  
取ること何れも野夫を以て遇せらるる  
あるのみ

○歌妓のなりたる

仁義道德と野夫と一輕薄浮行と意氣と  
るそのも天地間唯娼流と歌妓あるのみ而  
し歌妓尤も之と唱ふさまを千金乃子と

○醉翁曰  
所以次郎  
さん被愛

愛さけ落魄の通人を憐れみ情海に沈淪  
て一生浮む瀬河ることあり是を以て乎一  
旦氣小滌まぬ髯奴の金力小左右せらるる  
所となり身を委しし小星とあれとも愛離  
ま寵衰ふまば一時も榮華の夢裡に逍遙せ  
し或も空囊と遺失しある心地あり帰籍  
し眉を畫き粉河施らし復へい今晚と現も  
ま酒肉の間小縦横し情痴小奔り色慾に  
走り晚花乃候ま及びる人の攀折するなく

○此小町  
為有宛落  
魄

○不落  
道理浮氣  
家業

小野の小町の歌を吟しし歎息を及む  
び日々炊烟に追まるとを以て知らば識  
らむ四十島田の初老より嬌苑に住みわび  
果ても聘客の稀れありしり妓籍に立つこ  
と能まは始め卒兜婆小町の二舞をあり  
活路ありし糊賣老嫗となり或も寄席の  
三絃弾に傭られ更に當年の面影を止めぬ  
し終たるその十中七八と以てその三十才  
と過ぎて茶人乃身受くる處とあるも落付

○以二三  
字面勿煩  
法延

くこと能をび或も資本金と貫ふて平康な  
女將軍とかり。或も待合茶屋を開き旧客  
を請ひ復と残香を修め浮名を流すもの  
比々として皆是あり。その良人に帰して終  
りを全くあるものハ三千の妓中幾うに二  
三に過ぎざるべし。是も少年を弄り淫行小  
荒み髯奴を騙し情夫小貢したる等の因  
の果はして彼の釈迦牟尼佛涅槃の場に入  
ることあらぬ。猫の名と被ふるも亦怪し

○醉翁曰  
指麾王中  
洲花柳仙  
史醒史筆  
曰野夫乎

むに足らざるかや

○野夫

野夫とて何なる人物と云ふ乎。旦那たる資  
格を以て遊ぶもの、謂ふに歌舞場裡より  
擯居さるる隊長とある。此野夫も大抵駆け  
出しの田舎士族成立ての青衫。這出しの官  
員在郷の豪農俄の紳士に多し。此野夫  
の意に曰く藝者も何者ぞ社會下等の營業  
者なり金錢を見ねを咽を鳴らし媚を賣り

○賛成々々  
々々起立

貴賤を擇まば人品と論ぜし寝猫せんと促  
が歡心を得るに汲々たるものあり。此の  
如き賤業者何を以て我々に伍せしを得ん  
や我を之を買ふ且那あり且那たるもの何  
條是れと俱に愉快を盡さんや我の妓を聘  
せしむる止む酒の酌不呼ぶのみありと。その  
口実一應尤も乃様に聞ゆまごも果てて酌  
の爲めに妓を聘せしむる酒を飲む何ぞ  
酒樓を要せんや酒の酌亦何ぞ妓を要せん

○花柳日  
大劍突

や宜しく自宅あて飲み酌を細君は事足  
りかん凡そ酒を飲むに自宅に於てある程  
面白からぬもの。是れ李太白その人と俟  
むく明らなり彼の野夫奴も已に其面白  
からぬを知りしに酒樓に登るもの。そ  
の之小登れを獨酌の妙あらざるより勢ひ  
妓と呼ぶもの。心已に自宅に飲むの面白  
からぬと獨酌の妙あらざると知らむ。その  
心を愉快あると願ふもの。然らば則ち

見支音

卷二下

十一



○喝味

十分じふぶんに愉快ゆかいをつく尽くくささるる辱ぢのらはは是これは粹じゆ  
 も不粹ふじゆも一般いぱんの情態じやうたいありとは斯この如ごとき思おも  
 ひろりあづらも尚なほや已おれも且かつ那なあり妓かと  
 買かふ客きやくなきと威張いかはり返かへつつ妓かを賤婦せんぷ視みし胸むね  
 先に障さやり。疳癩かんらい玉たま小撲こぶく付つうう輕蔑けいべつ厭いとふべき  
 語ことを以もつて妓か小對せを果はくく如何いかん妓かも目ま前まへ  
 り不平ふへいと鳴なららいいケケススカカネネ汚お膽たん珍ちんダダヨヨ  
 と臂鉄砲ひてつぱう丹彈藥にだんりやくを込こめめ心こころ甚こころだ席せきに  
 侍しやくああるると屑くずとせせば或あるも都みやこ々々一ひとに訴うへ或ある

○大喝味

も諷言ふうげんと云いひ歌舞かぶ逆さかしし章臺ちやうたいも忽たちち憂うれト  
 て陰氣いんきある所ところとあるある疑うたひああるる彼の野夫かのやぶ  
 之これを見聞けんししその心こころに快こころささまるる乎や恐おそくく  
 不平ふへい噴ふん唄うた々々の喇叭らっぱを鳴ならら酒陣しゆじんを引拂ひき  
 ふに至いたるるべし。抑おさも神聖しんせいある金銭きんせんを費つやや  
 て馬鹿ばかよよささも嘲弄ちやうりやうに遇あふふか如ごとき之これを大間おほま  
 抜ぬけの兜かぶと天上てんじやう篋けつ棒ぼうの行ゆ止とまり即すなはち野夫やぶと  
 云いひひして何なにぞや故ゆゑに遊冶ゆうやも且かつ那なの資し格かくを  
 棄すて為なるるべき事ことぞあり。然しかれども妓かと共ともよ

段、記此一

與小愉快と尽くもと云て落語家又も幫聞  
 然たる舉行も所謂似山半可と免がれざま  
 を男らしく淡泊に遊ぶと通人の本色とを  
 る也是と遊治の秘訣とを然まとも野夫復  
 曰もんとも人へ人あり我も我あり劍突と  
 貫ふも馬鹿ふささるも我が自由権内あり  
 と云まも余も野夫ふ付ける薬と病院に問  
 合せんのみ

○遊びの種類

凡そ遊ぶ所に四種あり曰く酒樓曰く待合  
 茶肆曰く船宿曰く妓家はかり而して各々  
 の趣と異ふに

○酒樓

酒樓と遊び所の本地をさどもその実甚  
 面白からん何といふに先づ欲くもあき食  
 物も取らざるを得ず第一妓を聘して之と  
 遊ぶ小隣房に人ありて氣兼せざるは得ん  
 殊に長座をまを後客の障りとなれを機と

○思案坊  
哉其遊也

○魔王曰  
醉翁自矣

駭上來

○中洲曰  
醉翁之不  
好別有謀  
反也

計りて歸るの心配あり。況して妓を説得る  
 場合をぞや甚だ妨害あるものあり且  
 つ酔て帰途に就くと厭ふとさに當りて其  
 處小眠るを得ず遂に謀反を起し々芳原又  
 南品小走りの無分別を來て是れ酒家小  
 於て間々ある例あり余故々酒樓小飲むと  
 とを好むに  
 ○待合茶屋  
 待合茶屋を座敷料ととり々席を賃を業を

○醉翁曰  
非於余不  
能取此愉  
快

りその料五十錢以上一圓の間にありその  
 組織固と酒樓と異かむ客の好みに随ふ  
 て酒肴を取り寄せ切りに奨むることなく  
 席も酒樓の如く四隣合壁悉く客あるもの  
 甚だ稀かり故に珍鴨筋の妙も行へ想夫憐  
 の寂寥小自惚も唱へ易く。冬ハ炬燵小入て  
 妓と意氣筋もなり易く。眠らんとせむ一宵  
 を明の夜も氣支あく実小我家又妓と飲  
 むと一般ある趣きあり。其他氣兼あきま待

合に若くそのなり

○船宿

船宿とい画舫を以て業とありそのありども其組織と待合茶屋と異なる事なく楼上数房ありて飲むに便し待合に比されむ妓と意氣筋を以て潜伏を教ふ甚が妙あり餘の同一あるを以て茲に贅せし

○妓屋

妓屋に就く飲むも狎客の又た情夫に見立

○醉翁曰  
吾身果  
返

○毛珍坊  
々々々

○花柳曰  
御注意

長下支音

長之下

十五

てらまじり次郎もんその人乃如き者の多  
くなを所あり妓の未だ聘せらるる家も在  
て閑多時と機と一之小遊ふ則ち玉と二  
本と極め聘席のまを直ち小行くもの約  
一壺乃酒一碟の肴あり火桶を夾んで二  
人對して飲む三絃を弾き聲を低く笑ひ  
且つ酌む恰りも氣樂か夫婦の趣ありて情  
の濃のあると興の限あり以上三種の及  
ぶ所ありは去れども二階若くハ奥座敷

小唄さきを他の狎客のきまごげである  
と往々ほきを成丈け寂寥と要するもの  
に。それ此の如く費少くく興味ある者  
おきを妓乃母及び其婢小相應の纏頭を與  
へざるべからざす。到底多額の費用  
をかきむ之と意とせざる者を格別死錢と  
欲せざる者も暗に妓と纏頭の情はるふあ  
らざんむ爲むべきことなるべし

○上等の妓と容易く應と云ハ一め

○醉翁曰  
魔王被摘  
発秘竟不  
知可憐

たる逸話

余が飲み仲間紅紫魔王と云ふ半可通あ  
り。自から意氣を以て任し時とくは杵屋  
六童子と称す謂ふは長唄の三味線引杵屋  
に擬するなり。一夕柳橋お飲み喜代〇と云  
ふ妓を聘し喜代夙致あり技も亦可なり魔  
王垂涎三尺戀々已まざり。以て我が伎倆  
彼を應といふ。めん。則ち再三之と聘は  
而し未だ情と語らば一日喜代の紅禪曰

○中洲日  
足想像魔  
王當年之  
顔色

○魔王榮  
譽無此上

の正午と經て西山に春くと見て戯れり曰  
く卿の紅禪色已に辞せり。余此の如き禪の  
人と共に寝ると欲せばと直ちに手と拍  
て樓婢と呼び立所に緋縮緬の大巾三尺と  
購をひ喜代に與へて曰くサア之と占めず  
夫れながら寝てやらうと喜代此突嗟の賜に  
會ひ何の念もなく迂濶と錦帯と許したり  
と。魔王ふして一生の大出來あはる應來か  
らぬ妓と應と云く〜むるふハ斯く敏捷か

る才なくんを肱鉄砲の痛事を免らるべり  
らば魔王も亦我黨の一人ある哉オホン。

東京妓情卷之下 大尾

明治十六年九月十八日出版御届  
同 年十月廿八日刺成

編輯人

東京府平民

增田繁藏

神田區神田五軒町十六番地

出版人

東京府平民

東生龜治郎

日本橋區通旅籠町式番地

發賣所

同分店

同區同町壹番地

東生鐵五郎

神田區神田小川町十二番地

# 賣 捌 書 肆

東京芝區三島町

山中市兵衛

神田區神田五軒町

小笠原書房

同區雉子町

巖々堂

日本橋區通三丁目

丸善書店

同區同町

秩山堂本店

同區元大坂町

法木德兵衛

同區室町三丁目

滑 枕音 堂

同區長谷川町

武田平治

同區横山町三丁目

辻岡屋文助

